

## 編集後記

▼「現代宗教研究」第十九号をお届けします。十九号も寺院実態調査報告を特集としました。今回は島根県と北海道東部の寺院の現況を報告しました。地方寺院は大変だということ、かなり以前からいわれていましたが、その実態が調査報告されるに及んで、宗門内にかんがりの反響をよびました。今回の調査では、山梨・福井にまして深刻な状況にあることがわかりました。ある地域では、過疎のあまり、檀家の離散、

建物も倒壊し、事実上寺院の崩壊を来たしています。日蓮が一門のめざす教団は、「仏経と行者と檀那と三事相応して一事を成ぜん」（問註得意抄）、という姿であります。教団がいかにあるべきかは、いつの時代にも常に問われていかねばなりません。寺院の崩壊は、教団の弱体化、衰退の第一歩とみても見すぎることはないと思います。日蓮教団は、日蓮聖人の時から「講」によって結束し、拡大していったことを、宮崎所長の論述によって改めて知ることができました。また、今回は、いままでほとんど知られることのなかった、北海道の法華村開教開拓宗教移民について、その実態を多少なりと

も明らかにし得たと思います。

▼日蓮教団論は、教師一人一人が常に問いつつ提示し、そのあるべき姿を追究していくべき課題であります。宮崎・茂田井両先生の論述は、現宗研主催公開研究講座で発表されたものです。日蓮宗の歴史的伝統と使命を掘りさげ、一つの指標を示唆したのではないかと思います。

▼教団はこうあるべきであるとのビジョンを提言したのに、田中智学がいます。研究例会では、智学の『宗門之維新』をテキストにし、そこに提示されたビジョンを、宗門的、現代の視野に立つてその問題点を研究、討論し、古河研究員が例会での問題点をまとめ報告しました。渡邊信勝師の一文は教化のあり方を、経験・試行から問うたものです。

▼第三回教化化学研究集会を近畿教区協賛のもとに大阪市雲雷寺で開きましたが、これから各教区での研究集会を開き、教化の交流と研究をつみかさねて、各教師と共に教化のあり方を考えていきたいと念願しております。ここに、全教師のご協力とご支援によって研究所の活動を報告することができました。今後も本誌へのご批判とご支援、そしてご活用をお願い致します。

（高橋謙祐）